

## 海外の登山 バフィン島での登攀

名 越 實

私たち広島県山岳連盟の8名は1998年7、8月の2ヶ月、カナダ北極圏にあるバフィン島のアウニットゥック国立公園保護区内の岩峰Mt.フリーガ(1,990m)にて登攀活動を行った。

遠征の事の起こりは26年前の「岩と雪」31号に載ったダグ・スコットのレポートであり、それを決定づけたのも同168号のユージン・フィッシャーのニュースと写真であった。

○ 翌1996年から情報集めを始め、近年遠征に行かれた隊の方々とコンタクトを取り、色々教えていただくうちにどうもヒマラヤあたりと違っていまいち具体的に見えてこない事が多いのに気づいた。

私の中での絶対的な情報不足であった。8人の仲間の中には職を辞してまで参加する者もいるというのにこんな行き当たりばったりな計画ではまずいと思い、次の夏偵察に出かけた。日程の関係でサムフォード・フィヨルドまでは足をのばせず、アウニットゥックの一部を回ってきただけであったが、遠征が見えてきたという意味では私にとって大きな成果であった。

持ち帰った写真から目標をフリーガに決め、隊員それぞれの思いと日程の制約などから、カプセルスタイルとポラースタイルのパーティに分けることにした。8人のメンバーのうち3人は休暇を1月しかとれず、日数を最大限有効に使うため前後(登攀準備と後始末)を外して登攀期間に絞ったショートステイの方式とした。この考え方は悪くなかったのだが5人を1パーティにしたため結果的に不完全燃焼の者もでてしまった。

○ 7月16日から登攀活動を始め、ショートステイ組が来るまでⅠ峰は山本、宮重、Ⅱ峰は名越、井上、新山のパーティ編成で、好天が続いたこともあってほぼ日替わりでトップに立った。7月24日にショートステイの3名(両条、木原、溝手)が到着すると名越はⅠ峰にまわり、新しく3名がⅡ峰組に入った。以下に登攀の様子を記す。

Ⅰ峰は'96年にワリー・バーカーらが正面を初登攀していたので、我々はその右(西壁)にルートをとった。下部は左上する悪い凹角(A3+)が3ピッチ続き、苦戦を強いられたが、凹角を抜けるとまああのクラックラインを継続できて楽しい(A1~A4)エイドであった。

基部から200mのフィクス後Go-Up(ラッシュ?)し、カプセルスタイルで伸ばしてゆく。11ピッチ目のブランクセクションを突破してヘッドウォールのクラックシステムに手をかけたところで2度目の嵐(暴風雨)にみまわれた。ノーマルフライのポーターレッジが床上浸水状態となり、8月13日あと100m(3~4ピッチ?)を残して敗退を決定。降り続く雨の中凄絶な退却となり、今回一番の全力

## 1. 登山記録

投球を強いられた。

完登は逃したものの（それはひとえに自分たちの力が及ばなかっただけで）クライミングは十分に堪能したし、実に楽しかった。（私は50歳の誕生を“天空の城”にて祝ってもらって最高だった）

Ⅱ峰は正面のチムニーからブランクセクションを右上し、剣の形をした大ハングの上にてクラックラインをたどるルートを想定しほぼその通りのルートで完登できた。

荷物置き場にちょうどいいえぐれた取り付けからチムニーを上り、途中から右に振って正面壁に出てクラックシステムをたどる。3人（名越、井上、新山）それぞれ2回づつリードして200mのフィクスを張ったところで、ショートステイの3名が到着。

その後は<両条、新山>と<木原、溝手、井上>の2組が交代でリードするローテーションをとった。ショートステイ組がいつでも参加脱退出来るためもあってⅡ峰はポラ方式としたので、その日の開拓組は毎日B.Cからの出勤となった。その都度ユマリングのアルバイトはあるが、非番や沈殿の日はゆっくり休養できるという利点もあった。

ルート中には何の手がかりも無いようなブランクセクションが3ピッチくらいあったが、両条の奮闘で何とかショートステイの滞在中に完登することができた。

しかし我々の計画段階でのコンセプト「バフィンの壁と自然を思いっきり楽しもうぜ！」というものからすれば、不満足な結果になったメンバーもあったようだ。それはひとえにリードする機会の不均衡にあった。ショートステイの参加以後新山が一度もリードに立たなかったため両条対3人組の交代となり、実働11日のうち半分以上の6日を両条、残り5日を木原、溝手、井上の3人で分け合ったことになる。その貴重なリードの日は2日も途中から大雨となり一月休んできたのに計4時間しかリード出来なかった溝手のような例もでてきたのである。なぜ5人が公平にリードの機会を得られるようなローテーションにしなかったのかはわからないが、その場合は時間切れ敗退になっていただろうことは間違いない。

一応Ⅱ峰は完登でしかも初登攀となったものの、一番「バフィンの壁を楽しんだ」のは登攀リーダーの両条であった。本人は助っ人よろしく使命感に燃えていたのかもしれないが、たぶん完登などどうでもよかったであろう後の3人は気の毒であった。

遠征についての詳細は、私が先日まとめた報告書「大空の女神」を見ていただければいいと思うが、以下に少しバフィン情報を記す。

まず輸送：それも島内での輸送が大問題である。

アウニットゥク公園を中心とするパンノットコ（パンニョートンとも；pangnirtung）エリアでは今のところいい輸送手段は無いので、自分たちで考える他はない。

## 1. 登山記録

- (1) 6月の中旬まではスキードゥ（スノーモービル）が使えるので、パンノットコにあるイヌイットのエージェントに頼んで2～3ヶ月前に荷を送ってBCまで運んでおいてもらう。当然送り返しは雪の積もる10月以降となろう。
- (2) イカリットにあるヘリコプターを予約して、高い「呼び寄せ料+運搬料（C\$3,800+C\$1,000/時間）」を払ってBC入りする。この場合は事前に公園事務所の「航空機使用許可」を取得しておかないと公園内でヘリは使えない。
- (3) パンノットコの村中に呼びかけてポーターを募り、ヒマラヤの様にキャラバンを組む。ただし急に「荷を負える人」は集まらない（イヌイットに背負う習慣は無い）ので、前もってエージェントにでも頼んだ方がいい。
- (4) 極力荷を少なくして自分たちでトリプルぼっかでもする。ただフリーのルートに登るだけなら今回アスガードのダグ・スコットルートを登りにきたアメリカの二人（ジェフ・ボウマンら）のように1回でも運べるけど。

燃料：島内では一般にガスは無い。ケロシン、ナフサ、ホワイトガソリンが入手可能。

どうしても（合法的に）ガスカートリッジを選びたければ、前年の8月頃（に開通する）船便で送っておくしかないだろう。

食糧：旨いα米、純和食（海産物等）、以外は日本のスーパーの品揃えと変わらない。

パンノットコにアルコール類はいっさい無いので要注意？

尚、低温、非高所の極北ではよく食べるのでヒマラヤの倍くらいの量を計画したほうがいいと思う。

装備：基本的にはヨセミテ装備でよいが、特に雨風対策が必要。ポーターレッジのフライはエクスペディション（ゴアなら水滴に悩まされなくて最高）仕様の浸透しない物でないと役に立たない。

カムはキャメロットの全サイズ、特に#3～エイリアンの最小（青）までをよく使った。

ナッツはカムと入れ替えてつかったりしたが、極小サイズはハーケンの使えないところで威力を発揮した。

各種フックとバードビークも有用であった。

ハーケン類は薄刃の短小サイズにのみ出番があった。

キャラバン：トレッキングルートのウイーゼル谷でも踏み跡程度で、整備はしないみたい。

サミット湖までに50回ほどの徒渉があるので、水捌けのよいトレッキングシューズやステッ

## 1. 登山記録

キなどと沢歩きの身支度が必要。山に入るとおおかたは所々雪の乗った氷河歩きとなるが、キングパレード氷河はなぜか積雪が多く股まで潜るのでわかんじきがほしい。

天候：7月中は白夜なのでオーバーワークに気をつけたい。

低地では寒い雨が降るので合羽が必要。山に入ると日本の春山（アルプス）程度で雪、みぞれ、雨、風と天気は良くない。

気温は山中で平均 7月＝4度、8月＝2度位か。朝方には（雨の時以外）零下になる。

岩質：先カンブリア紀の花崗岩で非常に堅い。ジャンピングする場合穴3つでキリは丸くなる。

氷河に削られてほとんどの壁は上部が90度以上になっている。

クラックはおおむねきれいだが、パイ状になった所はやっかい。クラックのないところは（ヨセミテより荒めの）スラブか薄いフレークの張り付いた、ブランクセクションとなる。

I 峰西壁 新ルート：壁の3/4にて敗退（11P, 500m, A4, 5.9）

ルート名；（未完ながら）大空のシーユー

II 峰正面：初登攀（16P, 560m, A3+, 5.10 a）ルート名；劔の舞

隊員：名越 實（隊長）、山本茂樹（登攀リーダー）、両傘輝正（登攀リーダー）

宮重栄作（食糧）、井上直子（医療）、新山まゆみ（環境）

木原めぐみ（会計）、溝手康史（輸送）

（広島山岳会）